

親子における身体活動および運動態度の関係

Relationship of Physical Activity and Attitude between Parents and Children

1K04B111-6

霜降 壮

指導教員

主査 荒尾孝先生

副査 岡浩一朗先生

目的

身体活動を規定する要因は人口統計学・生物学的要因、心理・情動的要因、行動的要因、社会文化的要因、物理的要因の5つに大別される。中でも、社会文化的要因にあたる親のサポートは子どもの身体活動を増加させるうえで重要であると指摘されている。わが国でも親のサポートに関する研究はいくつか行われているものの、それらの見解についてはいまだ一致していない状況にあり、より詳しく研究が行われる必要がある。

そこで本研究では、小学校4年生から中学校3年生の児童・生徒およびその父母(保護者)を対象として、保護者の身体活動に関する行動・意識・態度を含む要因と子どもの身体活動の行動・意識・態度との関係について明らかにすることを目的とした。

対象と方法

山梨県都留市の小学校4年生から中学校3年生までの児童・生徒(子ども)をサンプルの対象とし、最終的には486名の児童・生徒とその保護者(合計972名)を分析の対象者とした。身体活動の測定に関しては児童・生徒を対象に、ライフコーダーEX(SUZUKEN社製)を使用して総エネルギー消費量、運動量、歩行数の測定を行った。また、児童・生徒(子ども)とその保護者に対してアンケート調査を実施した。子どもに対しては身体活動に関する行動・態度などの質問をし、保護者に対しては子どもと同様な質問の他に養育態度に関しての質問を行った。統計処理において、連続変数では対応のないt-検定、カテゴリ変数では χ^2 乗検定をそれぞれ行った。

結果

保護者の運動習慣と子どものクラブ活動との関係において、中学生と母親との間では、有意な関係はなかったが、クラブ活動を有する中学生の割合は、運動習慣を有しない母親の子どもより、運動習慣を有する母親の子どもの方が多い傾向があった($P=0.077$)。また、中学生と父親との間では、有意な関係($P<0.05$)が認められ、この関係は負の相関を示していた。すなわち、クラブ活動を有する中学生の割合は、運動習慣を有する父親の子どもより、運動習慣を有しない父親の子どもの方が多く、母親とは異なる

結果となった。

保護者の運動意識(好き嫌い)と子どもの運動意識(好き嫌い)との関係において、母親の運動意識(好き嫌い)と小学生の運動意識(好き嫌い)の間では有意な関係($P<0.05$)が認められ、運動に対して『好き』と回答した小学生の割合は、『嫌い』と回答した母親の子どもより、『好き』と回答した母親の子どもの方が多かった。

保護者の養育態度と子どものクラブ活動との関係において小学生と母親の間では、有意な関係はなかったが、クラブ活動を有する小学生の割合は、『厳しくない』と回答した母親の子どもより、『厳しい』と回答した母親の子どもの方が多い傾向があった($P=0.064$)。また、小学生と父親の間では、有意な関係($P<0.05$)が認められた。すなわち、クラブ活動を有する小学生の割合は、『厳しくない』と回答した父親の子どもより、『厳しい』と回答した父親の子どもの方が多かった。

考察

結果を総合的に判断すると、子どもに対する保護者の影響は父親と母親とでは異なり、また小学生と中学生においても異なる関係が認められた。母親に関しては自ら運動を実践することよりも運動に対する意識の面で子どもに影響を与え、母親の運動に対する意識が良いと子どもにとってもプラスに働く傾向があった。一方、父親に関しては運動に対する意識の面よりも実際に運動を実践する事が子どもに対して影響を与える傾向にあった。しかし、父親の運動実践が子どもにとってマイナスに働くことが示唆され、今後の詳細な検討が必要とされた。また、小学生と中学生の間では養育態度と運動習慣の実践に関して違いがみられた。この違いはまだ思春期を迎えていない小学生と思春期を迎えた中学生との保護者に対する反発・関心の度合いの差であると考えられた。

本研究は、小学生だけでなく中学生を対象にしたことや保護者を性別で分け、その性差を検討したことではこれまでの研究にはない新しい要素をもっている。しかし、本研究は横断研究であるため、両者の因果関係を明らかにしたものではない。また、対象である保護者と子どもとの間には他の交絡因子の存在が考えられることから今後詳細な検討が必要とされる。